前回までのあらすじ

流遠（るとお）やみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があって、友達がいて、好きな男の子がいる。
しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。
少女の名はツバキ・タカチホ。
彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。
ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅（せんめつ）であり、彼女はそのための存在――〈機獣（きじゅう）少女〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅（せんめつ）し、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思っていた。
しかし世界は改変され、やみひめと橘（たちばな）アサト、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。彼等はゼヘナを危機に陥（おとしい）れている別の敵性体――〈プレケース〉の存在を知り、その打倒に協力する事となった。
しかし状況は推移し、〈プレケース〉は姿を潜め、入れ替わるように新たな脅威が現れた。
機獣を思わせる特徴を備えた、蠍（さそり）の姿を模したそれは群れを成し、やみひめ達の滞在するオオミヤ・シティを蹂躙（じゅうりん）した。
同じ頃、『封鎖区域』に向かったメンバーもまた、同一と思われる蠍の群れと遭遇。行方（ゆくえ）不明者を出しつつも、オオミヤ・シティへの帰還を果たす。
合流した一同が情報交換を行っている最中（さなか）、報道番組から流れてきたのは、件（くだん）の蠍とは比較にならない巨大な移動物体だった。

※登場人物紹介はこちら

機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL

突如（とつじょ）、姿を現した巨大な移動物体。蠍（さそり）の姿をしたそれは、しかし明らかに有機物とは違っており、蠍の姿を模した機械としか思えぬ威容を誇っていた。

機獣。

かつて最強兵器として君臨した者達。

惑星ゼヘナの住人であれば、巨大な蠍の正体を機獣ではないかと考えるのは自然だろう。すでに記憶している者はなく、記録すら失われていても、その存在そのものが忘れられる事はない。機獣と人間の関わりは深く、今も〈ジェネレーター〉となって人々の生活を支え、〈機獣少女〉のパートナーとして共に〈カタストロ〉と戦う、なくてはならない存在であり続けているのだから。

しかし――それは人間の敵だった。

東方大陸最南端――『封鎖区域』とされている場所から現れたらしい巨大蠍は、普通自動車ほどの速度で北上、その予測進路上には小さな街があった。普段であれば腰の重い中央政府だが、住民には早々に避難命令が発令され、〈機獣少女〉にも出撃要請が下（くだ）った。

命令ではなく、要請。

それはつまり、生命の保障は出来ないという事を暗に示していた。

だがそれでも、二十人の〈機獣少女〉が志願した。住民の避難が完了するまでの時間稼ぎが必要だったためだ。なお、その人数は街に住む〈機獣少女〉の一割に満たない。

彼女等にも判っているのだ。

これは決死隊だと。

結果的に遅滞（ちたい）作戦は成功し、住民の脱出は叶った。

十八人の〈機獣少女〉の犠牲を払って――

第三十話

『ケンコンイッテキ』

時刻は午後五時十五分。日の入りが近付き、世界が茜色に染まっている。

普段であれば、物悲しくも幻想的だと感じる光景だが、今日は世界の終わりの予兆のようにしか感じられない。

逢魔時。

昼と夜の狭間である曖昧な時間帯。

家路につく者、街に繰り出す者、これから労働に勤しむ者とが、入り乱れるはずの時分に、しかし市街地からは人の気配が消えていた。市街地だけではない。住宅街からも灯は見えず、人の営みが感じられない。

まるで街からすべての住民が消えてしまったかのようだった。

街から人がいなくなれば、動くものもなくなり、音もなくなる。

静止と静寂だけの停止した世界。

世界はとっくに終わりを迎えたのに、街だけが残されたのだろうか。

――いや、違う。

人が造り出した建造物や交通手段に紛れて、異形がいた。あまりに巨大で、現実感に乏しい威容が、停止した世界という非日常に違和感なく溶け込んでいたためだろう。あまりに堂々と存在するため、その存在に疑問を抱く事を忘れさせる。

それは封鎖区域〈エリアD〉から姿を現した巨大蠍だった。

全長約百メートル。反り返って先端が前方を向いた尾までの全高は、約五十メートル。頭頂部までの高さでも十五メートルほどあり、これは四階建ての建物に相当する。

大きい。

武器を持ったところで、生身の人間が太刀打ち出来る相手ではない。質量が違いすぎて、どんな攻撃も焼け石に水だろう。

だが、それ以前に――

「……っ」

ツバキ・タカチホは小さく身を震わせた。

あの威容を目にしただけで恐怖を覚える。巨大なものに対する単純な恐怖ではない。心臓を直接鷲掴みされたような、不快で怖気を震う、本能に刻まれているかのような恐怖だ。

この星の生物であれば例外はない。あれはそういう存在なのだと判る。

「――ツバキ」

サイドポニーにした黒髪を揺らし振り向くと、蒼玉（サファイア）のような青い瞳に、同年代くらいの少女の姿が映る。

「やみひめさん……」

流遠（るとお）やみひめ。

長い黒髪をポニーテールにした、可愛らしい少女である。琥珀（アンバー）を思わせる橙色（だいだい）の瞳は、ツリ目だが愛嬌があって怖さは感じない。ほんの少し前までは普通の――戦いとは無縁の生活を送っていた、十二歳の小学六年生。ツバキとは違う、普通であるが故（ゆえ）の強さと優しさを持った、友人であり、恩人であり、たまに姉のように感じる不思議な存在。

「きっと大丈夫」

念を押すように、やみひめが告げる。彼女に握（にぎ）られた右手を通して、温（ぬく）もりが伝わってくる。

根拠などない、ただの気休め。

それなのに、不思議と大丈夫だと思えてくる。思わせてくれる何かが、やみひめの言葉にはあった。やはり不思議な少女だと、ツバキは改めて思う。

「やみひめさんは時々、お姉さんみたいですよね」

「えっ、そうかな!?」

やみひめが嬉しそうに驚く。素直だなと、ツバキは内心で微笑（ほほえ）んだ。こういうところは、むしろ妹っぽい。

「地球でお世話になっていた時も、実はそう思っていました。歳の近い姉というのは、こんな感じなのかなと」

姉のような存在は身近にもう一人いる。六つ年上で、いつも自分を気遣ってくれる彼女は、判りやすく姉のようだが、やみひめは違う。一つしか違わないため、年上の余裕がある訳ではなく、しかしだからこそ、自分のために一生懸命になってくれているのが伝わってくる。それが嬉しい。

「じゃあ、お姉ちゃんって呼んでくれてもいいよ！　ツバキみたいな妹だったら、私も嬉しいし！」

「それはお断りします」

喜色満面のやみひめに、ツバキは普段の澄まし顔を浮かべて言った。

「私、やみひめさんにはお友達でいてほしいんです……駄目、ですか？」

少し不安げに顔を俯（うつむ）けるツバキ。結果的にそれは上目遣いとなり、表情も相まって、見る者の庇護欲（ひご）を堪（たま）らなく刺激する光景となっていた。計算ではなく、天然でしか出せないあざとさだ。

「駄目じゃないよ！　もう、ツバキって本当に可愛いよね……！」

落胆は一瞬。やみひめは愛おしさのあまり、思わずツバキを抱きしめていた。

やみひめの思わぬ反応に少し戸惑いながらも、ツバキは控えめにだが、抱擁に応じて彼女の背に腕を回した。

大丈夫だ。きっと作戦は成功する。

そう内心で呟き、ツバキは遥か前方で夕陽に照らされて微動だにしない巨大な蠍を、ビルの屋上の物陰から一瞥する。

時刻は午後五時二十分を回っていた。

●　●　●

『封鎖区域』から出現した巨大な蠍の姿をした移動物体は、その形状から〈スティンガー〉と呼称される事が決まった。惑星ゼヘナにおける神話・伝承の類で、かつてこの星を未曽有の危機に陥れた怪物の名に由来するらしい。

巨大蠍――〈スティンガー〉は十八人の〈機獣少女〉が犠牲となった遅滞作戦の後、進路上のクシマ・シティに侵攻。三基の〈ジェネレーター〉施設を破壊した。

目的は〈ジェネレーター〉に組み込まれた機獣のコア、それを自らの幼体に与える事だったのだ。

〈スティンガー〉とその幼体群は更に北上し、すでに三つの街を陥落させていた。目的は〈ジェネレーター〉に組み込まれたコアのみで、破壊や略奪を行う訳ではない。だが、エネルギー供給のほとんどを〈ジェネレーター〉のみで賄っている現在、それが使用不能になる事は都市機能の死を意味する。

エネルギーがなければ何も出来なくなるのが、近代文明の弱点なのは地球と変わらないのだと、橘アサトは思った。東方大陸だけなのかもしれないが、人種や倫理観、街並みや文化様式といったものが驚くほど日本と似通っている。だからなのか、この星の人々が置かれている状況を、他人事のように考えられない。それは〈スティンガー〉が此処、オオミヤ・シティに到達する日が、そう遠くないからかもしれないが。

アサトは改めて周囲を見渡す。其処は自分達が身を寄せている〈L．C．ファクトリー〉の談話室ではなく、別の階層にある会議室だった。前方には発表者用の机がぽつりと置かれ、アサトが座っている対面には長机がびっしりと置かれている――が、席は三分の一も埋まっていない。すぐ隣や後ろの席には、やみひめやツバキなど、見知ったメンバーが固まっており、あとは疎に知らない顔ぶれが席についている。列席者はほぼ〈機獣少女〉

らしく、数人いる大人は彼女等が所属する事務所のマネージャーや関係者らしい。こう言うとアイドルのようだが、〈機獣少女〉の活動はそれに近いらしく、日本で暮らすアサトにとってはいまいち実感が湧かなった。

年頃の少女が集まれば騒々しくなりそうなものだが、会議室はしんと静まり返っており、口を開く者は誰もいない。この星の状況を鑑みれば、それも当然かもしれない。中央政府は〈スティンガー〉の予測進路上の街に避難命令、もしくは勧告を出すのみで、具体的な対策を講じない。避難民の受け入れ問題で手一杯だというのが専らの噂だが、〈スティンガー〉の出現に乗じて活動を再開した〈プレケース〉への対処要請は、〈機獣少女〉協会へと出されているらしく、懐疑的な意見も多い。

一時は撃退に成功したように思われた〈プレケース〉と、その後に現れた〈スティンガー〉の因果関係を含め、不安は確実に人々の間で蔓延していった。

やがて、会議室に二人の女性が連れ立って現れた。

一人は金髪碧眼の穏やかな印象の美女。女子大生くらいの容姿だが、実際には三十二歳らしく、未だに信じられない。

彼女はロゼット・コダール。こう見えて稀代の技術者で、此処〈L．C．ファクトリー〉の最高責任者でもある。

ロゼットに付き従うように現れたのは、自らをアニスと名乗った娘だ。年齢はよく判らない。十代にも見えるし、二十代半ばだと言われれば、そんな気もする。前をまっすぐに切り揃えた特徴的な長い黒髪と、表情を消した端正な容貌は、和服が似合いそうなアジアンビューティに近い印象を受ける。

アニスが無言で会議室に集まった面々を見渡す。その紫眼に映った人数に対し、少ないと落胆したか、絶望的な状況下でよくぞこれだけ集まったと歓喜したかは、その表情からは窺えなかったが、想定内というのが可能性としては高い気がした。彼女はすべてを見通している――そう思わせる雰囲気があるのだ。

少なくとも、ただのロゼットの秘書とは思えない。

「じゃあ、始めようか」

二人が前方の席に腰を下ろすと、ロゼットが言った。

「カナコ、あなたはこっちへ」

「……ええ、判ってるわ」

ロゼットが『どうして、そんな所にいるの？』といった調子で呼ぶと、アサトの真後ろの席にいた少女が立ち上がった。

「……〈戦姫〉」「本物だ」「綺麗――」

にわかに会議室がざわついた。声を潜めてはいるが、本人の耳には届いているだろう。

確かに綺麗だ。けして派手ではないが隙なく整った容姿。飾らず、媚びず、静謐であるが故の美しさとでも言えばいいだろうか。艶やかな長い黒髪と、黒瑪瑙のような黒い瞳の組み合わせは、その落ち着いた佇まいと相まって、大和撫子を体現しているようにアサトは感じた。

カナコ・T・シングウジ。

〈戦姫〉の二つ名で呼ばれる、名うての〈機獣少女〉である。

「――〈オフィス・タカマガハラ〉のカナコ・T・シングウジです。本日はお集りいただき、ありがとうございます」

にこりともせず、淡々と挨拶を終えると、カナコは『もういいでしょう?』とロゼットに目線を送ると、元の席には戻らず、ロゼットとアニスが座る前方の席から、少しだけ離れた場所に置かれた椅子に腰を下ろした。学級会でよく、教師がいる位置だ。

「〈L．C．ファクトリー〉のロゼット・コダールです。確認となりますが、これはあの巨大蠍――通称〈スティンガー〉への対抗策を話し合う場です」

〈スティンガー〉の侵攻は続いている。このまま北上を続ければ、確実に此処オオミヤ・シティに到達する。中央政府が対抗策を講じない以上、自分達で動かねばならない。無論、我が身可愛さもあるが、このままでは人類の生存圏そのものが奪われる。すでに陥落した街の住民には申し訳なく思うが、闇雲に援軍を送って勝てる相手ではない。

万全を期して必ず勝たなくてはならないのだ。

そのためにカナコを代表者とし、各方面に声をかけ、現在に至っている。本人は渋っていたが、ほぼ満場一致でカナコが適任となった。ロゼット曰く、知名度は高いが公の場にほとんど出ないため、『彼女が動くなら勝算があるのではないか』と思わせられるとの事だった。結果、会議室は満席とはならなかったが、この状況で呼びかけに応じた者がいただけでも御の字かもしれない。

「〈スティンガー〉に関する情報提供の後、有効な戦術を立て――必ず殲滅します」

趣旨確認をし、ロゼットは短く、しかし強い言葉で締めた。対抗策を練るだけではない。必ず倒すのだという意志を示す必要があった。

「まず大前提として確認しておくわ――あれは倒せるの?」

ロゼットの言葉に列席者が息を飲み、『しかし、本当に可能か?』という当然の疑問が浮かんでいるであろうタイミングを見計らい、カナコが問うた。

「もちろん。あれは生物だからね」

これは仕込みだ。あらかじめ打ち合わせがあった事は、アサトも知っている。

「生物っていうのは完璧じゃない」

生物は矛盾を抱えている。相反する性質を同時に備えている。

「完璧じゃないから生物なんだ。もしあれが本当に完璧な存在だったとしたら、人間だけじゃない――すべての生物がこの星から淘汰される」

完璧なものが一つあれば、他は要らないから――そう、稀代の技術者は断言した。

言葉遊びのような気もしたが、小難しい理屈を垂れ流すより、倒す事は可能なのだと列席者に印象付ける事が重要なのだ。

「そう。なら、いいわ」

ロゼットの回答に納得した様子で、カナコは短く応じた。

心なしか、会議室の空気がわずかだが軽くなった気がした。わずかな希望でも、あるのとないのでは大違いだ。ただ、それは〈機獣少女〉と思われる者達だけで、残りの列席者――つまりマネージャーなどの大人達は、その限りではない。彼等は知っているのだ。世の中、そう上手くはいかないという現実を。

「では本題に入ります。まず最初に、〈スティンガー〉に関する情報提供を彼女からしてもらいます」

「アニスだ。ロゼット・コダールの秘書――そういう認識で構わない」

ロゼットが促すと、隣の席に着いていたアニスが初めて口を開いた。不遜と取られても仕方ない口調だが、不思議とそういった感情は湧いてこない。それは彼女が纏う超然とした雰囲気と、自分達に向けられる、すべてを見通すような紫眼のためかもしれない。

「〈スティンガー〉と呼称されているあれは機獣だ。それは間違いない」

『機獣』という言葉に会議室がざわつく。

かつて惑星ゼヘナに存在した、機械の身体を持った生物群。正確には現在も生息しているが、一般的に機獣と呼ぶ場合、人間によって兵器化されたものを指す。いつしか戦争がなくなり、必要とされなくなった機獣は唯一残った自身であるコアを機体から抜かれ――これだけ聞くとグロテスクなイメージが浮かぶが、そもそも機獣の機体というのは人工物らしい――現在は〈ジェネレーター〉か、〈機獣少女〉の持つＭＢデバイスに組み込まれ、それ以外は休眠施設で眠っているらしい。

「だが、ただの機獣ではない。あれは――古代種だ」

それからアニスが語った〈スティンガー〉と呼ばれる古代種の話は、神話の域に達する内容だった。

●●●

逢魔時。

カナコは茜色に染まる無人の街を、身を潜めつつ進みながら、三日前に行われた集会を思い返していた。

アニス曰く、〈スティンガー〉は古代種と呼ばれる機獣で、今の人類が誕生する以前の時代から存在したらしい。更に驚くべきは、アニス自身もまた古代種だと明かした事だ。あの少女――ツバキは二十代に見えると言っていたが――の姿は仮初らしく、それもまた古代種の成せる業だとか。そして、〈スティンガー〉によって引き起こされたのが〈終末戦争〉と呼ばれる災厄で、それを終わらせたのがアニスを含めた数体の古代種だと語った。

まるで神話だ。

だが、そんな妄想のような話にも関わらず、カナコはアニスを頭のおかしい妄想狂だとは思えなかった。

「――アイナ」

民家の車庫に身を潜め、周囲の確認を終えると、カナコは同行している小柄な少女の名前を呼んだ。

蒼いショートヘア。黄色の瞳。中学生くらいに見える幼い容姿だが、その表情はとても冷静で大人びている。

アイナ・ボーグマン。

〈獅子王〉の二つ名を持つ〈機獣少女〉で、こう見えてすでに十八歳である。

「ん？」

「アニスの話、どう思う？」

「なんだ、信じたから此処にいるのではないのか？」

なにを今更といった表情を浮かべるアイナ。口調もそうだが、幼い容姿との差異が激しい。彼女の事は知っていても、こういう形で接する機会はなかったのだと再認識する。

「疑ってる訳じゃないわ。ただ、アニス自身も古代種だとか、〈終末戦争〉だとか、実感が湧かないだけ」

「それについては同感だ。だがまあ、真実であれ、盛っているのであれ、〈スティンガー〉の情報には関係がない。ならば、よいではないか」

人間は他人の都合の良い面しか見ず、期待と違っていれば、裏切られたと勝手に落胆し、

責める事さえする。カナコはそういう輩が嫌いだった。だから、アイナのように割り切った考え方が意外であり、驚きでもあった。

「……」

「なんだ？」

カナコが黙った理由が判らず、きょとんとするアイナ。容姿が幼いので、そういう表情をされると相手が年上である事を忘れて、頭を撫でたくなる衝動に駆られる。

「相手のすべてを信じる事など土台、不可能だ。ならば、信じられる部分だけを信じ、あとは自己責任だ。そのくらいの気持ちでおらねば、人付き合いなど出来ん」

カナコが無言になってしまった理由を告げると、アイナは呆れ気味にそう答えた。

「シングウジ、お前は潔癖すぎる。それでは生きるのがつらいぞ」

「……知ってるわよ」

苦笑気味に言いつつ、ぽんと頭に手を載せてきたアイナに対し、カナコは拗ねたようにそう返した。

時刻は午後五時二十分を指していた。

●●●

カナコとアイナが配置に着いた頃、街の中心部からはかなり離れた郊外の工場跡地にて、クラウ・P・ブランとルイゼ・ルンシュテッドは作戦開始の時を待っていた。

白いメッシュが入った長い黒髪と、真紅の瞳を備えた少女――クラウ。

緩く波打つ紅いロングヘアと、切れ長の桃色の瞳を備えた少女――ルイゼ。

どちらも整った容姿と、抜群の体形を誇り、十代にしては大人びた雰囲気を漂わせている。

「――緊張していますね」

「え……？」

不意に声をかけられたからというのもあるが、それ以上に、緊張しているのを見抜かれた事に驚いた。クラウは考えている事があまり表情に出ないため、こんな風に心配される事は珍しい。

ルイゼがクラウに倣って窓を覗くと、遥か前方に夕陽に照らされる異形の姿が見える。かなり距離があるため小さく見えるが、それでも全体像が把握出来るという事は、実際にはかなりの巨体を誇っている事になる。

〈スティンガー〉だ。

その姿を視界に入れたルイゼの表情が、一瞬だが歪んだのをクラウは見逃さなかった。巨大なものに対する恐怖はクラウも理解出来る。だが、ルイゼが〈スティンガー〉に対して感じた恐怖は、クラウが感じるそれとは根本が異なる。

ルイゼ達、惑星ゼヘナの住人が〈スティンガー〉に対して抱く恐怖は、本能に刻み込まれた根源的な『畏れ』らしい。それは〈機獣少女〉ではないロゼットも感じており、しかし地球人であるクラウややみひめ、そしてアサトは、そういった感覚はなかった。唯一の例外はカナコくらいだ。

これから始まる〈スティンガー〉殲滅作戦において、口火を切るのがクラウとルイゼの役目である。

すでに訓練で戦い方は覚えたつもりだが、クラウにとっては初の実戦となる。しかも、古代種と呼ばれる脅威に戦いを挑むのだ。緊張しないはずがない。

「判るの……？」

「判りますとも。表情に出なくても、雰囲気で察せます。アイナも同じですから」

驚きを隠せないクラウに、ルイゼが優雅に微笑んで答える。確かに、アイナは常に生真面目そうな表情で、どちらかといえば感情を表に出すタイプではない。彼女と付き合いが長いであろうルイゼは、その経験からクラウの緊張を見抜いたのかもしれない。

「初陣で緊張するのは当然ですわ。しかも敵は圧倒的に強い」

ですが、とルイゼは間を置く。

「あの二日間でワタクシとアイナから受けた特訓を思い出してみてください」

〈スティンガー〉殲滅作戦が決まり、実戦経験の浅いクラウとやみひめは、それぞれルイゼとアイナから、付きっきりで戦い方を叩き込まれた。ＭＢジャケットの加護があるとはいえ、何度も死を感じた。大袈裟ではなく、あれ以上の地獄はないと思う。

「……殺されるかと思った」

「でしょう？　ならば、もうあんな大きいだけの蠍モドキなど、恐れるに足りませんわ」

にこりと笑みを浮かべるルイゼだが、クラウにはその笑顔が悪鬼羅刹の類に思えた。あの特訓がトラウマになっているのかもしれない。〈スティンガー〉に対する畏れがあるにも関わらず、自分を気遣ってくれているルイゼに、クラウは感謝しつつ申し訳ない気分になった。

「――そういえば、あなたにお礼を言うのを忘れていました」

「え？」

礼を言われる心当たりがない。むしろ、特訓に付き合ってもらったこちらこそ、礼を言っても言い足りない。

「ワタクシとアイナは、実装してもらった荷電粒子砲に命を救われました。ブラックボックスの解析は、あなたのＭＢデバイスのおかげだと聞いています」

荷電粒子砲の理論は解析不能（ブラックボックス）となっていて、現在の惑星ゼヘナでは失われた技術（ロストテクノロジー）となっていた。しかし、クラウのＭＢデバイス〈ラインハイト〉によって、それが復活した。

「私は何もしてないよ」

「それでも、あなたのおかげである事に変わりはありません。だから、お礼を言わせてください――ありがとう」

同性のクラウでもドキッとしてしまうほど、ルイゼの笑顔は綺麗で誠意が込められていた。

「う、うん……どういたしまして」

ルイゼは美人で高貴な雰囲気だが、近寄りがたいイメージがほとんどない。物腰が柔らかいためだろう。

（私ももっとニコニコすれば、怖がられなくなるのかな……）

なまじ整った容姿であるため、クラウは周囲から近寄りがたく思われる事が多々ある。だが、それも自ら壁を作ってしまっていたのかもしれないと、ロゼットやルイゼを見て思うようになった。

「さて――そろそろ時間ですわね」

気持ちを切り替えるように、ルイゼの表情が変わる。

「うん。あと三分を切ってる」

クラウが確認すると、時間合わせをした時計が五時二十七分を回っていた。

ルイゼは頷（うなづ）くと、荷物の中から拳銃を取り出す。運動会や陸上競技の映像で見るようなシンプルな意匠（デザイン）のそれは、信号弾を打ち上げるための信号拳銃である。〈スティンガー〉とその幼体の周囲では通信障害が起こり、無線による連絡が不可能となるため、時代錯誤（アナクロ）だが確実な信号弾での合図が採用された。

「誰からも青と黄色の信号弾は上がりませんでしたわね」

トラブルがあった際、自力で脱出が可能な場合は青。救援を必要とする場合は黄色の信号弾を上げ、作戦は即刻中止して撤退する手筈（てはず）になっている。

「何事もなければいいけど……」

青と黄色の信号弾が上がらないからといって、無事だとは限らない。なんらかのトラブルで信号弾が使えず、そのままやられてしまっている可能性（ケース）もあり得る。街には無数の〈スティンガー〉の幼体がいるため、遭遇戦になっているペアもいるかもしれない。だから、作戦開始時刻には赤の信号弾を上げ、数が足りなかった場合も即時撤退する事になってい

る。戦力がギリギリである以上、数が足りなければ勝算はない。

信号弾の打ち上げ準備が整うと、ちょうど作戦開始まで一分を切った。秒針が頂上を指した時、赤い信号弾が五つ上がれば作戦決行となる。

ルイゼが廃工場の窓から外に降り立ち、信号拳銃を上空に構える。

「十、九、八、七――」

続いて降り立ったクラウがカウントダウンを始める。

「六、五、四、三――」

緊張が再び高まる。まずは無事にすべての信号弾が打ち上がる事を願う。

「二、一、零！」

「！」

ルイゼが信号弾を打ち上げた。

時刻は午後五時三十分。

夕陽が沈み、暗くなった夜空に、赤い閃光が瞬く。

数は――五つだった。

「始めましょう」

「了解！」

『――〈拘束〉！』

二人の起動言語が重なり、少女達の中身が書き換わっていく。人間としての制限を解除しながら、人間としての在り方を固定するための、一種の自己暗示――故に拘束という言葉を用いる。

〈機獣少女〉。

それは機獣のコアの欠片を組み込んだMBデバイスを用いて戦う、少女達の総称。

その力が今、古代種とはいえ、同じ機獣を殲滅するために振るわれようとしていた。

●　●　●

〈スティンガー〉殲滅作戦が開始された。

作戦の第一段階は〈竜帝〉ルイゼ・ルンシュテッドと、新顔らしいクラウ・P・ブラン、二人の荷電粒子砲による先制攻撃。

先の遅滞作戦において、〈スティンガー〉は強力な障壁のようなものを全身に張り巡らせており、一切の攻撃を受け付けなかった。まずはそれを突破せねばならない。そのための策が、二人の最大出力の荷電粒子砲による一点突破だった。三十秒に渡って照射され続け

た極大の二条の眩い光は、見事に〈スティンガー〉の障壁を使用不能にした。
「強力な負荷をかけ続ければ発生器がダウンする――ロゼットの見立て通りでしたね」
障壁を突破され、装甲に荷電粒子砲の直撃を受けよろめく〈スティンガー〉の巨体から視線は離さず、黒とコバルトブルーのMBジャケットに身を包んだ少女が呟いた。
年齢は高校生くらいだろうか。膝裏まで届きそうな水色の長い髪を二つ結びにした、おとなしそうな少女である。
「これで奴を倒せる見込みが出てきました。あの時の雪辱を――」
だが、奥歯を噛みしめる少女の瞳には、深い憎しみの色が浮かんでいた。感情を押し殺しているが、それでも抑えきれない怒りに、握った拳が震えている。
「バニラ、あまり気負うな」
そう言って、少女――バニラの水色の髪をわしゃわしゃと掻き乱す者がいた。
年齢は同じくらい。バニラとは対照的な、白と淡藤色のMBジャケットに身を包んでおり、外はね気味の白いショートヘアは、毛先が同じく淡藤色に見える。
「やめてください、ライカ。髪が乱れます」
ショートヘアの少女――ライカの手を逃れ、バニラが苦言を呈す。途端、〈スティンガー〉に対して湧き上がっていた憎悪が、僅かだが霧散した。
「仇討ちを否定はしないよ。けどね、死んだ人間のために出来る事なんてないんだ。あんたが死に急いでも、誰も喜ばない」
「判ってる！　けど……！」
五日前に起きた〈スティンガー〉との初の会戦は、クシマ・シティの住民を逃がすための遅滞作戦となった。救援が駆け付ける猶予はなく、街にいた二十人の志願者のみで行われた同作戦は、作戦の成功と引き換えに十八人の死者を出した。〈機獣少女〉が戦場で命を落とすのは、これが記録上初となる。
バニラとライカは、その生き残りだった。
途中で逃げた訳ではない。作戦終了時に生き残っていたのが彼女等だけだったのだ。
「誰もあたし等を責めちゃいない。あの子等だって――」
「それも判ってる！　けど、それでも……っ！」
〈スティンガー〉への憎しみが抑えられない。仲間を護れず、生き残った自分が許せない。
根が優しく、真面目で、内に溜め込んでしまう――バニラとはそういう少女だった。
「――あたしだって、あんたと同じだよ。だから、バニラにまで死んでほしくない」
「っ！」
薄っすらと浮かんでいたバニラの涙の粒を、そっと指先で払い、

「それだけだよ」

と、ライカはにかっと笑って見せた。

「……ごめんなさい」

睨むようだった表情から一転、しゅんとなって俯くバニラ。サバサバした性格だからといって、ライカが仲間の死を気にしていない筈がない。それなのに、こうしてなんでもない様子で自分をフォローしてくれる友人に、バニラは申し訳ない気持ちになった。

「いいって事さ。そんじゃ、そろそろ――」

ライカが右手に握っていたライフルを肩に担ぐように載せ、遥か前方にいる〈スティンガー〉に背を向ける。

「あたし等の出番だ」

「……はい！」

バニラも表情を引き締め、ライカに倣う。

視界に現れたのは無数の蠍モドキ――〈スティンガー〉の幼体群だった。成体――つまり、親よりは遥かに小さい。三日前にカナコ・T・シングウジを代表者として行われた集会の映像で見たものと、ほぼ同じだろう。胴体は普通自動車くらいで、生身の人間にとっては脅威でも、〈スティンガー〉ほどの威圧感はない。

バニラとライカの役割は〈スティンガー〉への攻撃ではない。此処で幼体群を足止め、もしくは殲滅する事だった。全員での集中攻撃も意見として出たが、それでは大量の幼体群に囲まれて必ず犠牲が出る。だから、〈スティンガー〉への攻撃を行う者と、そのための露払いをする者に戦力を分けた。俄かには信じがたいが、流遠やみひめという少女には尋常でない攻撃力があるらしい。

「――そうだ。ほれ」

「へっ？」

不意にライカが自分の得物を放って寄越したので、バニラは慌ててそれをキャッチした。

彼女が手にしていたライフルだ。

細長い長方形の形状は、銃床まで含めれば一メートルはある。上部には狙撃用の光学照準器を備えた大型の電磁加速砲。名は〈ライジン〉。

「狙撃はあんたの十八番だ――背中は任せた！」

そう言うと、ライカは背中に保持していたもう一丁のライフル〈コクウ〉を握り、幼体群に向かって駆け出した。

「ちょっと！　……もう、勝手ですね！」

文句を言いつつ、バニラは手早くレールガン〈ライジン〉の調整を始め、すぐに必要な

い事に気付いた。バニラに合わせた調整がしてあったのだ。思い付きのように渡しておきながら、最初からそのつもりだったのだろう。

「そんなだから、イケメンとか言われるんですよ……！」

地面に右膝を突き、左の膝は立てたまま、腰を落とす。銃床を右腕の付け根に当て、左手は銃身の下に添え、肘は立てた左足の膝に載せ、ライフルを抱えるように保持。

ニーリングと呼ばれる狙撃姿勢のひとつで、すでに身体に染み付いている。

光学照準器を覗き、すぐさま――発射。

距離があるため音は聞こえないが、光学照準器内では砕け散る幼体と、何か文句を言っているライカの姿が見えた。恐らく弾丸が彼女を掠めたため、怒っているのだろう。

わざとだ。このくらいの八つ当たりは許してほしい。

「――――」

気持ちを切り替えて狙撃手としての役割を全うする。積極的に敵を撃つのではなく、前衛の背中を護る。敵はウジャウジャいるのだ。優先して撃破する目標を見誤ってはいけない。

「――――」

無言で、無心で、ただただ効率を優先する機械になる。

限りなく物質化させた機力の弾丸が、加速され、次々に幼体を撃ち砕いていく。

「いやはや。やっぱすごいわ、バニラは」

嫌な位置にいる〈スティンガー〉の幼体が、次々とバニラの狙撃によって撃破されていく。

「あたしも良い所見せなきゃ――ね！」

間合いに入った幼体を真一文字に両断し、出来た隙間を縫って背後の幼体に圧縮された機力の弾丸を叩き込む。

真紅の鈍い煌めきを放つ右手のカタナ〈ヒエン〉。

破壊力と貫通力に秀でた左手の大口径ライフル〈コクウ〉。

両手でまるで性質の違う武器を扱いながら、その動きは華麗で――やや過剰だった。

まるで見世物であるかのような派手なアクションは、魅せるための殺陣のようで、実戦でありながら見る者に現実感を失わせる。

〈ＦＡ：Ｇ エンタテインメント〉。

ライカとバニラの所属するそこは、他の多くの事務所のようにアイドルとして所属する

〈機獣少女〉を売り込むのではなく、戦場での戦いそのものをある種の興行とする変わり種である。だからこそMBジャケットや武装は、主に男性が好む外連味を優先したデザインを採用し、戦い方もそれが映えるようなアクションを取り込んでいる。ほぼ使う者がいない飛び道具を採用しているのも、その一環だ。

特に、一般的な〈機獣少女〉のMBジャケットは、コスプレ衣装や、それに準じたものがほとんどだが、ライカとバニラのそれは機械的な装甲といった意匠を感じさせる。それこそ、ロボットアニメや特撮ヒーローの領域である。

無論、見た目だけのハッタリではなく、最大限の実用性が考慮されているのは言うまでもない。それは偏に〈FA：G エンタテインメント〉の装備開発を行っている技術者、通称〈Ka〉の技術と趣味に依るものである。

それはともかく――

「フル装備が間に合わなかったのが悔やまれるけど――」

跳躍による大上段からの唐竹割り。くるりと身を捻りながら遠心力を上乗せした薙ぎ払い。死角を衝いたつもりで飛びかかってきた者には、こつんと銃口を当ててゼロ距離で機力の弾丸を撃ち込んでやる。

「まあ、バニラの援護もあるし、この分ならなんとかなるかな」

斬って、斬って、撃って、また斬って。次々に、しかも軽やかに幼体を撃破していくライカ。魅せる必要などないが、これもまた身に染みついてしまった習慣のようなものだ。

惜しむらくは、今夜の舞台に観客がいない事だった。

●
●
●

〈FA：G エンタテインメント〉のバニラとライカが交戦状態に突入した頃、露払いを担当するもうひとつのペアも戦闘を開始していた。

一人は槍タイプ、もう一人は戦斧タイプのMBデバイスを得物とし、共にチャイナ服を思わせる意匠のMBジャケットに身を包み、〈スティンガー〉の幼体群を相手に連携を組んで対応している。

どちらかが前に出れば片方がフォローに回り、互いに互いの死角を補い合う。敵の数がなかなか減らないため地味に見えるが、その実、かなり高度な連携が行われている。技術以上に、互いの信頼がなければ成立し得ない、ペアである事を十全に活かした戦術だと言えよう。

〈87プロダクション〉に所属するリツとモカである。

槍使いのリツは十五歳の高校一年生。黒いベリーショートが似合う、つんとした印象の美人で、槍の長い間合いを活かし、踏み込み過ぎず、しかし確実に幼体を屠っていく。

戦斧使いのモカは十二歳の小学六年生。おかっぱくらいの焦げ茶のショートヘアにレースのリボンが似合う。小柄な体躯に不釣り合いな得物を軽々と振り回し、リツの動きに合わせた位置取りも見事な筈なのだが、どこか危なっかしく見えてしまうのは、多分にあどけなさが残る容姿のためなのかもしれない。

「――ふっ」

リツの槍が素早く弧を描き、幼体の節足を斬り飛ばす。彼女のMBデバイス〈シューツェン〉は穂先にのみ刃が付いた、取り回しの良さを優先した軽量タイプである。故に、ピンポイントな攻撃は得意だが、大きな相手を叩き潰すようには出来ていない。

「でぇぇぇい！」

勇ましいとは言えないながらも、自分を奮い立たせるような叫びと共に、モカが脚部を失った幼体にトドメの一撃を見舞う。同じ槍タイプでも、彼女の強化された戦斧は先端に巨大な凶器を備えており、もはや槌矛と呼ぶべきものに変わっていた。

「滅せよ！」

元から平たかった胴体にモカのMBデバイス〈リーピン〉が叩きつけられ、半ばまで埋まったそれが彼女の発した発動言語によって破壊の意志を示す。すなわち、先端の凶器部分――無数の突起を備えた五十センチほどの五角柱から、八方に向けて、機力によって形成された青白い刃が生えた。

内側から刃でズタズタにされた幼体は、独特の甲高い断末魔を上げて頽れた。

「――――」

最初はモカを鈍臭い少女だと思っていた。厄介な後輩を押し付けられたと、内心では感じていた。だが、〈プレケース〉の襲来を経て、彼女とまともに向き合うようになってから、リツの中に先輩としての意識が芽生え始めた。

だからこそ、こんな危険な作戦に参加させたくはなかった。

誰かがやらなくてはならない。だが、自分達でなくてもいい。二つ名持ちでもない、ごく平均的な実力では、むしろ足手まといになるかもしれない。それでも二人が此処にいるのは、モカが強く参加を希望したためだった。

〈プレケース〉の襲来時、二人は駆け付けてくれた〈戦姫〉カナコ・T・シングウジと、〈難攻不落〉ツバキ・タカチホによって命を拾った。その恩義がある。

そして、モカは先日のオオミヤ・シティに現れた〈スティンガー〉の幼体との戦いで、人の死に立ち会った。リツが到着した際、すでに警官は事切れていたが、モカは彼が殺さ

れる光景を見てしまったらしい。その経験が彼女に与えた影響は大きく、それはＭＢデバイスの強化にも表れている。

「――先輩、大丈夫ですか？」

幼体の攻撃が届かない高所に上り小休止していると、モカが気遣うような顔でリツを見上げていた。こういう所は変わらない。鈍臭いくせに勘が良いのだ。

「生意気」

「えへへ……」

無表情のままリツが言うと、モカは嬉しそうに笑った。以前であれば委縮して謝られていた事を思うと、わずか数日で随分と関係が変わったものだと感じる。

「行くわよ。このペースなら私達でも足止めくらいは出来る」

役割はあくまで露払い。周辺の幼体を〈スティンガー〉の元に行かせなければいい。大部分は〈ＦＡ：Ｇエンタテインメント〉の二人と、カナコ・アイナのペアが担当してくれている。情けない話だが、自分達は彼女等のような二つ名持ちのエースではないのだ。

それでも――

「凡人にだって意地があるわ。立派に仕事をしてみせましょう」

「はい！」

無名だが強さを秘めた二人の〈機獣少女〉が戦闘を再開した。

●
●
●

〈スティンガー〉殲滅作戦が発動し、街の各所で戦闘が開始された。

此処ヒナミ・シティは、〈ジェネレーター〉が七基以上ある中規模な街で、当然のように〈スティンガー〉の侵攻を受けた。幼体の機獣は人間やその他の生物と同様、経口摂取で養分を取り込まなければならず、もっとも効率がいいのが別の機獣のコアを捕食する事らしい。

これは食物連鎖――つまり自然の摂理であり、残酷だなんだというのは綺麗事だ。だが、〈ジェネレーター〉は惑星ゼヘナの社会システムにおいて生命線である。その機関である機獣のコアを捕食される事は許容出来ない。

すでにヒナミ・シティを含めて三つの街が都市機能を失った。多くの住民が住む場所を奪われ、犠牲者も出ている。これ以上の被害を出さないためにも、此処で〈スティンガー〉を殲滅しなくてはならない。

結局、三日前に行われた集会で、最終的に作戦への参加を表明したのは十人だけだった。

アニスの口から語られた古代種の全容は途方もなく、それを思えば、十人集まっただけでも僥倖と捉えるべきかもしれない。

〈スティンガー〉に対する畏れ。

それはやはり、惑星ゼヘナの人間の本能に刻まれた、抗いがたい呪いのようなものなのかもしれない。

古代種〈スティンガー〉の巨体を間近に捉え、そんな考えがツバキの頭を過った。

怖い。全長約百メートル、頭頂部までででも約十五メートルある生物など、こうして見ても現実感がない。

「……ひっ！？」

〈スティンガー〉の平たく大きな頭部、血のように赤いバイザーの奥にあるらしい眼と目が合った――気がした。

そう。この高さであれば目が合うのだ。

いっそ、もっと高い位置に目があれば、相手は足元を這う存在など、文字通り目もくれない。だが、四階建ての建造物くらいの高さからであれば、相手はこちらを認識出来る。強く巨大なものに意識を向けられると、自分が如何に弱く小さい存在であるかを思い知らされる。

「――ツバキ！」

名前を呼ばれ、急な浮遊感を覚え、景色が一気に横に流れていく。

「しっかり！　大丈夫だから！」

「やみひめ、さん……？」

はっとなり、状況を確認する。

〈スティンガー〉の攻撃から、竦んで動けなくなってしまったツバキを、やみひめが抱きかかえるような形で避難させたのだ。先ほどまで立っていた場所に目を向けると、アスファルトの地面は高熱で焼け爛れており、一部は溶けて溶岩のようになっている。

恐らく荷電粒子砲を向けられたのだ。〈スティンガー〉の尾の先端に見える砲身。あれが発射口である事は、バニラとライカが持ち帰った戦闘記録で確認されている。

「すみません！　私……っ」

クラウとルイゼの荷電粒子砲の一点突破によって障壁が突破されたのを確認し、ツバキはやみひめの直掩として、共に〈スティンガー〉を目指した。幼体は〈ジェネレーター〉やＭＢデバイスの保管施設へ散らばっており、他のメンバーが足止めをしてくれている。

他に障害はない。目標に辿り着き、攻撃を行うやみひめを護るのがツバキの役割なのに、自分が護られていては本末転倒だ。

「もう大丈夫です。自分で走れます」
「……うん、大丈夫そうだね！」
強がりではないと確信したのだろう。やみひめはツバキを下ろし、自身のＭＢデバイスである〈ヤタガラス〉の先端を直上に向けた。
恐るべき脚力だ。やみひめはツバキを抱え、荷電粒子砲を躱しながら、あの一瞬で〈スティンガー〉の側面に回り込んでいたらしい。
「〈両断するもの〉――！」
掲げた得物――機械的な意匠のカタナのような大振りの剣、その刀身が紅い光を纏い、それは長大な刃を形成していく。長く、巨大で、〈スティンガー〉の全長にも匹敵する。以前にも見た事はあるが、ここまで巨大な刃を形成した事はなかった。
やみひめが使う特異な力。それが何なのかは判らないが、そんな事はどうでもいい。
彼女が何者であっても、ツバキにとって大事な友人である事に変わりはない。
ならば、それでいい。
「――その威を示せ！」
長大な紅い光の刃が振り下ろされる。
巨体にしては素早い動きだが、〈スティンガー〉の回避行動は間に合わない。
超巨大な蠍に超巨大な刃が振り下ろされる光景は、もっと全体を把握出来るような位置から見ていれば、あるいはシュールに映ったのだろうか。
やみひめが振り下ろした〈両断するもの〉と呼ばれる攻撃は、〈スティンガー〉の中心部分を横一文字に押し潰し、その平たくも巨大な胴体を地面に叩き伏せた。
ロゼットの見立てでは、〈スティンガー〉は重力制御システムに相当する何かで自重を支えており、それを破壊出来れば自滅させられると仮説を立てた。古代種とはいえ、この惑星に存在する以上、物理法則からは逃れられない。あんな巨体が自力で動き回れる筈がないのだと。それはアニスも保証していた。
「……っはあ！」
「やみひめさんっ」
長大な紅い刃が消え、やみひめが脱力した様子で地面に座り込む。慌ててツバキはそれを支え――ようとして叶わず、全身で彼女を受け止めるような形になっていた。かなり消耗したのだろう。やみひめの表情は、疲労の色がはっきりと見て取れた。
「……やったかな」
「はい。おつかれさまでした」
〈スティンガー〉は微動だにしない。八本の節足も、前方に反り返っていた尾も、完全に

地面に投げ出されている。巨大すぎる自身の身体を支えられなくなっている。重力制御システムに相当するものを破壊出来たのだろう。

作戦は成功したのだ。

「そっかぁ……なんか、終わってみるとあっけなかったね」

「私は死にかけましたけど」

脱力した体勢のまま言うやみひめに、ツバキは背後から彼女を支えながら、苦笑気味に答えた。

「助けられただけで、何も出来ませんでしたし」

「そんな事ないよ。一緒にいてくれて、心強かったよ」

まだ疲労の色が濃い表情に笑みを浮かべ、やみひめはツバキに微笑んだ。こういう、スマートではないが一生懸命に気遣ってくれようとしてくれる所が、カナコとは違う姉っぽさだと改めて感じる。

「やみひめさん……」

「だから――ね？　そんな顔しないで」

やみひめは顎を上げ、反るような姿勢でこちらを覗き込んでくる。完全にツバキの身体に、背中から全身を預けている格好だ。

「……はい。ありがとうございます」

「うん！　あー、ツバキはやっぱり柔らかいなぁー」

後頭部をやたら擦り寄せてくるやみひめ。そこはちょうどツバキの豊かな膨らみの谷間で――

「……」

「ちょ、痛い！　痛いよ、ツバキ！　無言で抓らないで！　私、がんばったのに……！？」

「それはそれ、これはこれです。本当に……え？」

「なに……！？」

突如、〈スティンガー〉の頭部が破裂した――というより、壊れた扉を内側から蹴破ったと表現するのが近いだろうか。頭部の装甲板が吹き飛び、そこから姿を現したのは一人の少女だった。

「……女の子？」

「恐らく。しかし、あの格好は……」

明らかに普段着ではない。白と黒、レースとフリルで彩られた、退廃的な少女ファッションの極致――ゴシックロリータ。

「〈機獣少女〉……？」

やみひめが半信半疑といった様子で呟く。

しかし、なぜ？　捕らわれていたのか？

活動を停止した〈スティンガー〉の頭部から這い出た少女は、眼帯で覆われていない左の黒い瞳で、じっとこちらを見つめていた。

●
●
●

同時刻。

同じ露払いでも、遊撃として動いていたカナコとアイナのペアもまた、一人の少女と対峙していた。

彼女の事は知っている。

顔も、名前も、人柄まで知っている。

明るい茶色のロングヘア。切れ長の薄い緑色の瞳。

カナコと同じ高校二年生で、整った容姿は間違いなく美人に分類される。

馬上槍タイプのＭＢデバイスを使う、人格に問題はあるが実力はある〈機獣少女〉。

「……なぜ、こんな所にいる？」

アイナは、最後に彼女を目撃したメンバーの一人でもある。封鎖区域で〈スティンガー〉の幼体が出現した際、彼女は入れ替わるように地下の虚空へと消えたのだ。

「どういうつもり？」

カナコは静謐な表情のまま、淡々と、答えなど端から期待していないかのような口調で訊ねた。

「トチ狂ったの？」

カナコとアイナが幼体群と対峙している最中、彼女は突如姿を現し、攻撃を仕掛けた。

幼体群にではなく――カナコに対して。

「答えなさい――ソウマ」

呼ばれた少女が、にやと口角を上げた。

二人の前に現れたのは、封鎖区域で行方不明となった〈機獣少女〉。

キリエ・ソウマだった。

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十話をお届け致します。

久々のバトルです。けど、実はあんまりバトってません。何度か書いてますが、小説で戦闘シーンをやっても、しょせんは文字の羅列です。アニメや漫画には勝てません。なので、シチュエーションで盛り上げてみたつもりですが、果たして成功しているかどうか……。

あと、〈スティンガー〉を倒すのが呆気（あっけ）なさすぎるとお思いでしょうが――まだ終わらんよ！

他にも新キャラだったり、名無しだった〈機獣少女〉二人に名前が付いたり、久々のツバキのロリ巨乳いじりだったり、見た事のある娘（こ）や、行方（ゆくえ）不明になってた『困ったちゃん』など、年内最後なので盛り込みました。

把握（はあく）出来る範囲で、来年まで覚えておいてくださるとありがたいです。

それでは謝辞を。

まずはチェックをしてくださっている紙白さんに感謝を。今回はバニラちゃんとライカさんの出演依頼にも快諾をいただきました。二人の元ネタは後日こちらのサイトでも紹介予定ですが、待てない方は紙白さんの『ホビコム』ページでご覧ください。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。今年もお付き合いくださり、ありがとうございました。

年内に終わらなかったなぁ……二部を始めた自業自得ですね、はい。

２０１７／12／11　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX　第2部』小説ページに戻る